ピクトグラムのメッセージに対する誤認
－標準化の是非の観点から－

大島　萌々華

ピクトグラムは、トイレなどの一般的なものから防災に関するものまで様々な場面で使用されている。その中で、防災などの領域では統一されたピクトグラムが理想であるが、一方でトイレなどでは多様性が容認されている。本研究では、統一されたピクトグラムに焦点を当て、誤認率の観点からピクトグラムの標準化について検討する。

先行研究として、森ら（2014）が災害時の迅速な避難が必要な和歌山県東牟婁郡を対象にピクトグラムの認知度と理解度に関するアンケート調査を行った。その結果、ピクトグラムの認知度や視認率が低いことが指摘され、ピクトグラムに対する理解が不足していることが示唆された。この課題に対処するために、学習時間の設定やピクトグラムと文字の併記が理解を高める手段として提案された。

本研究では、半構造化インタビューによる質的調査を行い、ピクトグラムとの関連性の深い専門分野の調査協力者 4 人（看護学類、障害科学類）と他の学類の調査協力者 2 人を対象にした。これにより、出身地や学類によるピクトグラムの誤認とその背後にある要因に焦点を当て、従来の研究との差別化を図った。質問としては、教育の可能性とピクトグラムの標準化と固有性の議論の 2 点が浮かび上がるように項目を設定した。

調査の結果、誤認率は周辺情報と調査対象者の持っている背景、先入観といった個人の様々な解釈枠組みと関係が深いことがわかった。個々人の語りから、標準化に賛成か否かは、各々のバックグラウンドが大きく関係していることがわかった。賛成の意見には、①ピクトグラムは一目見ただけで意味をくみ取れる必要があり、言語が通じなくても緊急事態の時に最優先の行動をとる必要があるため、皆が共通の指標をもつべき、②その人のバックグラウンドによって捉え方が変わってくるので、標準化すべきなどの意見があった。一方で、オリンピックではピクトグラムが表示されていたが、災害関連となると競技のようにただ 1 つの意味を示すのではなく、起きた災害の種類や避難場所の種類など様々な情報が 1 つのピクトグラムに含まれている。地域によって災害、地理、色や形に持つイメージも異なると考えられるため、世界規模で標準化させる必要はないという意見もあった。

全体として、学習機会がピクトグラムの理解に与える影響が顕著であり、それが標準化を支持する傾向と結びついている。また、学習機会が多いほど、ピクトグラムに対する理解が高まり、標準化を重視する傾向が見られる。海外経験者は異なる文化・環境に触れ、標準化の必要性を理解しやすいことも明らかだ。さらに、色に関する情報からは、信号機の色など先入観が大きく影響しており、これがピクトグラム理解にも影響を与えていることが示唆される。学習機会がピクトグラムの理解に与える影響と、色などが相互に関連し、標準化に賛成する意識形成に影響を与えていると言えるが、出身地は関連が認められなかった。

（指導教員　後藤嘉宏）